

ザクセン喜劇におけるヒポコンドリーの諸相と医学

小林 英起子

【キーワード】 ザクセン喜劇、ヒポコンドリー、クヴィストルプ、諷刺喜劇、医療社会史

序

18世紀前半、啓蒙文化の一つの中心地ザクセン地方ライプツィヒで著されていた、諷刺類型喜劇いわゆるザクセン喜劇や小説にはヒポコンドリー（和名 心気症）やメランコリーを患う人が度々登場する。この時代の喜劇は論じられることが少なかった分野でもある。それら喜劇における病人と医者との台詞に着目して、ヒポコンドリー描写の持つ意味を、演劇史、医療社会史、精神医学史の観点から探ろうとするのが本論の目的である。¹

ザクセン喜劇の理論的指導者であったヨハン・クリストーフ・ゴットシェート教授が編纂した『ドイツ戯曲集』に収められたザクセン喜劇と周辺喜劇を研究対象とする。1745年のクヴィストルプ作『心気症の男』、ミュリウス作『医者』、ゲラート作『病妻』、ゴットシェート夫人作『身分違いの結婚』（1743）、『フランス人女家庭教師もしくは令嬢』（1744）、『遺言状』（1745）、レッシング作『若い学者』（1747）および『自由思想家』（1749）が対象である。18世紀から19世紀にかけての侍医・患者の姿、治療の実際については、テレンバッハ著『メランコリー』に詳しく、バーバラ・ドゥーデン著『皮膚の下の歴史』では、医者との姿と女性患者の現実、治療の実際について描写されている。近代精神医学の黎明期の記述については、クレペリンの著書が先駆的である。

1 ヒポコンドリーとザクセン喜劇

ゲラートやゴットシェート夫人も手紙の中で、この病に苦しんだことを告白していた。古い時代の迷信と黎明期にあった近代科学の発展の間で人々の精神生活の安定が揺らいだ時、ヒポコンドリーが時代病になっていった。現代の日本社会は、時代の転換期にあって、閉塞的な社会状況と従来の価値観の揺らぐ中で、かつてない「うつ時代」と言われている。不安定な精神生活を送る人、心を病む人々が増えている現代の日本の姿も、初期啓蒙主義の時代精神の状況といささか重なるところがあると言えるだろう。

ヒポコンドリーは、日本語で心気症とも呼ばれていて、「病気ではないのだが、絶えず自分が何か深刻な病気にかかっているのではないかと思ひこんでしまう病気」のことを意味している。古代ギリシャのヒポクラテスは、この病気を「ヒポコンドリウム」と呼んでいた。ヒポとは下方

の、コンドラルとは脇腹を意味する。この病はガレノス以降、脇腹の下の器官からくる病気だと思われていて、内臓説が主流の時期もあった。7世紀にはパウルオが *melanchoria hypochondria* とこの病を名づけていた。これにより、18世紀前半はまだメランコリー、ヒポコンドリーはほぼ同じ病だとみなされていた。したがって当時の医学では、メランコリー、ヒポコンドリーはさまざまな種類の心的障害を表す唯一とも言える用語であった。18世紀後半から徐々にヒポコンドリーはヒステリーと対比して考えられるようになり、19世紀中頃にはフランスのブリケーが、ヒステリーは女性の子宮に起因する病気で、ヒポコンドリーは主として男性の病気であると唱えた。ヒポコンドリーは長い間、一義的に分類されてきたわけではなく、今日でも病気概念に関してもまだ議論の余地を残す病気である。

2 クヴィストルプの五幕の喜劇『心気症の男』におけるヒポコンドリーと医学

ヒポコンドリー（心気症）を患う若い主人公エルンスト・ゴットハルトとその訪問者を描いた『心気症の男』は、テオドール・クヴィストルプ（1722-76）が書いた異色喜劇であり、本稿の中心となる作品である。そこには現代人にも共通する心の病の症状が描写されている。

クヴィストルプは富裕商人の息子としてロストックに生まれ、ロストックとライプツィヒの官吏として仕事をした。実務の傍ら、悲劇『アウレリウス』と諷刺類型喜劇、いわゆるザクセン喜劇を三つ、『牡蠣』（1743）、『山羊裁判』（1744）、『心気症の男』（1743）を著した。

『心気症の男』では、自分が何か重大な病気に罹っているのでは、と絶えず気に病む真面目なエルンスト・ゴットハルト青年を主人公に、彼がヒポコンドリーに苦しんだり、次々と精神の病を発露していく様がいかに現実味を帯びていて、グロテスクではあるが、面白く描かれた喜劇である。作品が描かれた1740年代のドイツでは、メランコリーに悩む人々が多くて、ヒポコンドリーないしはメランコリーは、一種の時代病ともとらえられる。ヴァルター・ブッセは当時の苦悩の意味を、「18世紀において苦悩は、肯定的な徴候とともに理解されていた。というのも、他の感情に比べて、自分が不幸であると感じる程、人間は内面的に活発に、烈しく感じることはないからだ」と説明し、² この喜劇を「病理学的時代タイプ」に分類している。

主人公エルンストには、二人の侍医がついており、さまざまな治療を長期間試みているのだが、いっこうに治癒しない。父親のゴットハルト氏は、いとこフレーリッヒ氏もかつて鬱状態に苦しみ、死んでいると思込んだ状態にあったり、自殺願望を見せていたのが、町一番の陽気娘と結婚したことで、すっかり病が快方したことを思い出す。これを先例として、ゴットハルト氏は陽気さの点で、母親と同じ程というフレーリッヒ氏の娘を息子の嫁に迎えたいと願い、まさにこの日訪ねてくるのである。

二人の侍医は患者の所見を巡って論争する。クレープスシュタイン医師曰く、「それはヒポコ

ンドリーです。さもなければメランコリーと同じものです。憂鬱、ヒステリー性の苦悩、つまり脾臓病です。』³

それに対してムスカートは、細かい病気定義にこだわりを見せる。

ムスカート医師 ヒポコンドリーは特別な病気です。メランコリーとは特別な病気のことです。憂鬱も特別な病気です。それに脾臓病も特別な病気です。(中略)だからこの人は四つの病気を持っておられる。つまり悪性のヒポコンドリー、もしくは完璧なヒステリーの熱情に罹っておられる。⁴

二人の見解は当時の医学知識をほぼ反映させたものである。ヒポコンドリーは脾臓からくる病気であるとする内臓説と、神経に起因するという説があった。クレープスシュタインとは、結石を暗に示す名であるが、彼はエルンストが水がめ座生まれゆえ、水が向いていると言い、水によって治療がなされるべきだと主張する。ワイン一杯、鉱泉水および温泉が、陽気な気持ちを保つのに特に効果があると言うのである。他に飲料、粉末、点滴、丸薬、クロスティーレ、芳香軟膏、鼻薬も彼の意味する薬である。ワインや鉱泉水の試飲の場は誇張されているが、鉱泉療法は当時からすでに行なわれていたメランコリーに対する治療方法であった。このような主張は、ドイツのハレとベルリンで17世紀から18世紀にかけて名をはせた医化学者ゲオルク・エルンスト・シュタール（Georg Ernst Stahl, 1660-1734）の生氣論にならったものである。⁵

これに対してムスカート医師は科学の力で治療しようとする。四つの病気に合わせた薬の処方により、自分にまかせておけば1年もたてばエルンストはすっかり健康になると言うのである。ムスカートの処方とは、

1. ヒポコンドリーには分解薬と駆除薬を
2. メランコリーには特別な種類の薬草と頻繁な瀉血を
3. 憂鬱には洗浄薬と清浄薬を
4. 脾臓病には強力な緩下剤と下剤と吐剤

を指示する。昔の人は血や体内に宿る邪気を何とか追い出すために、水銀剤や薬草によって体を浄化しようと考えたり、瀉血によって「濃密になった血液の澱を取り除く必要がある」と考えたのである。洗浄薬や清浄薬は誇張に過ぎるが、ムスカートの処方も当時やはり見られたものを列挙したものである。⁶ 医師曰く、

ムスカート医師 それによって、彼の頭脳を自然の状態に回復させるのです。それによって私は

ヒポコンドリーをあらゆる息づかい、痙攣から解き放つのです。それによって、彼の血液を剰余部分から浄化します。それによって閉塞した脾臓と肝臓の血管に血液を送り込むのです。⁷

クレープスシュタインの親類はワインの店を富ませ、ムスカートの身内は薬局ゆえに、身内を潤す皮算用も怠りない。

エルンストの症状とは、絶えず不安におびえ、ぐずぐずとためらい大騒ぎをするというものである。Ⅱ幕で見せた症状は、不安の余り、霧や雨雲が目の前に広がる妄想に発展する。実直すぎる彼は自らを責める。

エルンスト 誰でも思うがまま私に信じ込ませることができるんです。誰かが私に足に痛風があると言えば、私はすぐに両足で立っていらなくなります。誰かが肺結核にかかっていると言えば、私はすぐに肺に痛みを感じます。誰かが私は哀れに見えるよと言えば、私はたちまち姿を消してしまうのです。⁸

この日の訪問者クロイツィンもヒポコンドリーに苦しむ老婦人である。エルンストとコーヒーを飲みつつ、死の恐怖、頭痛、心悸亢進、便秘等、数々の体調不良を大袈裟に訴える。彼らの嘆きは、健康な娘フレーリッヒには、たわいない、滑稽な言動に聞こえるが、彼女は父が患った病気を知るべく、無邪気に笑いつつ病気の正体を理性的に分析してみせる。ヒポコンドリーは当時まだ、接触により感染すると考えられていた。ダンスの場面でもエルンストは魅力的なフレーリッヒに触れもせず、その場を去り、憂鬱な夢想の世界に逃げ込む。Ⅴ幕6場、夕暮れの部屋でエルンストは深い孤独と恐怖を感じ、死だけが自分を苦悩から救ってくれるのだと、一人もがき、飾り紐で首を絞める自殺未遂に及ぶ。うつ病患者の心理状態がここに濃縮されている。献身する家僕の機転と娘の介抱で、若者は息を吹き返し、病の本質を悟る。家僕は医者よりも鋭い指摘をし、恋する気持ちこそが主人をはつらつとさせ、黒胆汁を追い払い、薬草茶、点滴、薬も一切不要と言う。フレーリッヒも、きちんとした食事、たまの楽しみの機会があれば、医者も病気も遠ざかると教え諭す。

この喜劇で、悩みを打ち明ける人物らは実直であり、その症状も心気症のみならず、睡眠障害、統合失調症、うつ病、自殺未遂へと、ありえぬ早さで刻一刻と変幻する。法律家の作者は、自分が知りえた精神の病を巧みに紡いでみせる。ブッセによれば「心気症の人は市民的感傷的時代の典型」ということになる。この喜劇は、心を病む人の訴えがどのようなものかを今によく伝える。ドイツの古典喜劇の話が、繁栄を謳歌したはずの現代で、不思議なほどに日本人の胸に迫ってくる。先行き不透明とも言われる現代で、静かに心を蝕まれる人が増えている。病の息子を気遣う父や、家僕、フレーリッヒ嬢の観察眼と献身ぶりは今日でも示唆に富むだろう。

3 ミュリウスの喜劇『医者』におけるヒポコンドリーと医学

ゴットホルト・エフライム・レッシングのいここにあたるクリストローブ・ミュリウス(1722-1754)は、ザクセンのオーバーラウジッツ出身で、ライプツィヒで医学を学び、文芸学でゴットシェート教授の影響を強く受けた多彩な才能の持ち主である。雑誌 „Naturforscher“ の発行を手始めとして、道徳週刊紙 (Moralische Wochenschriften) を編集したりして、ベルリンを活動の舞台としていた。1745年の諷刺喜劇『医者』は、メランコリーに悩む富裕な商人夫人の侍医を勤める二人の怪しい医者悪徳ぶりを痛快に暴露してみせる。作者の医学的知識が反映され、診察風景に当時使用されていた注射器、蒸留器、静脈切開用器具が出てくる。誇張表現もあるが、メランコリーの治療方法をいまに伝えてくれる。

患者である夫人の名は、フィールグート (Vielgut、壮快) 夫人。気分が優れぬ夫人は、二人の侍医に出会って以来、いつしか頼りきりとなり、瀉血の他に Quecksilber (水銀剤) の処方なしには、落ち着くこともできない。患者は無知により、いつしかやぶ医者達の薬漬けとなってしまふ。これには18世紀中頃、メランコリアの患者に対して、実際なされていた治療例がある。オランダのプールハーフェもまだ古典古代以来の黒胆汁説に依拠した時代であり、メランコリアとは当時、「粘り気」、すなわち「物事に拘泥する、一つのことばかりに拘泥し、一つのことが心を占めて離れない状態」⁹ を意味していた。このような場合、気分転換を進めるために、「下剤などによって血液の粘性を低くし、血行を促進するような液体の質を改善する治療」がなされた。メランコリアが進行すると、激しい衝動や激烈な感情が見られ、これは「血液の澱が血管や神経管を塞ぐためと考えられ、この澱を取り除く処置」¹⁰ が考えられたわけである。そのため、「水銀などの強力な重金属系の薬品や、ヘレボラスなどの強力な薬草を多量に用いたり、多量の瀉血などによって、身体から多くの液体を奪う療法」¹¹ がとられていた。その意味で、ミュリウスの喜劇における描写は、誇張の一方で、実情をある程度反映するものだったのである。

1758年頃、フランスでは、治療法をめぐるバティエとモンローの論争のような、精神医同志の論争があった。静脈を開けて血を出す瀉血は、弱った患者の命を危険にさらすものであり、ヘレボラス薬草も強力すぎる。したがって自然治癒力をもっと重んずるべきだと考えからくる。

劇中のフィールグート夫人は、気を病む病のはずが、吐瀉と下剤の薬を与えられて、狂気の治療を施されそうになる。妖しい医師に対して批判的な娘のルイスゲンと恋人ダーモンによる疑惑の解明により、やぶ医者ピリファー医師 (Dr. Pillifer) とリセプト医師 (Dr. Recept, 領収書を意味する) の正体が暴露される。重病をたやすく信じ込まされる患者の盲信と私腹を肥やそうとする偽医者悪徳がここで戒められる。

4 ルイーゼ・ゴットシェートの喜劇におけるヒポコンドリー

1745年にはヒポコンドリーが題材となった喜劇が相次いで生まれている。ゴットシェート夫人もこの時期にヒポコンドリーに関わる三つの喜劇を書いている。1744年4月27日付の夫人の手紙では、ヒポコンドリーに罹ったことを打ち明けている。

「私はヒポコンドリーに罹っていますが、幽霊を恐れなければならないものに入れるなんてとうていできないのをあなたもご存知でしょう。」¹²

1743年の『身分違いの結婚』では、18世紀前半にすでによく見られた斜陽貴族と富裕商人の家における政略結婚の野望が諷刺的に描写されている。北ドイツのフォン・アーネン・シュトルツ家の娘には恋人の貴族ではなく、富裕商人ヴィリバルトとの縁組が進められていた。夫人には、いとこのヴィルトホルツという来客もあるが、せき込んでみては肺結核を心配する。肘掛椅子に座り、気絶する素振りを見せたり、神経麻痺も訴える。夫人の様子から、いとこは流行のヒポコンドリー病ではないかと疑いをかけ、羊飼いを館に出入り禁止にすれば、病は消えるだろうと言う。麻痺は現代医学ではヒステリーとしてとらえられる病状である。夫人は家の行く末を悩むあまり、こうした病にかかり、どんな運動も何か重大な病と結びついているのではないかと大仰に訴える。

娘フィリピーネは、たとえ商人の若者と結婚することになったとしても、恋人ツィーアフェルトとはこれからも会えるし、貴族の自分は商人に誠実である必要もないとたかをくくる。娘は求婚者ヴィリバルトと対面するや、体調不良やヒポコンドリーを訴える。この家ではヴィリバルト一人が町人、他の人物は家僕を除けばすべて貴族という構図である。母と娘、次いで父アーネンシュトルツからもヴィリバルトは辛辣な言葉を浴びせられ、なぶり者にされる。

夫人はもっぱらヴィリバルト青年に政略結婚ゆえに接近しているように見えるが、都合が悪くなるや体調不良を訴え、話の輪からいつの間にか姿を消してしまう。病状は相手に応じてたちまち変化して、大騒ぎになる。この劇では病む人の病状についての訴えはあっても、他のザクセン喜劇のように医者が登場することはない。取り繕ったもてなし、それとは裏腹の心理的駆け引き、商人に対する優越感、および市民から見た貴族階級への憧れの描写に、この劇の喜劇性がある。娘と庭師の変装した恋人ツィーアフェルトの密会が、ヴィリバルトの目撃情報で再び明らかになる。(IV/4) どたばた場面も最高潮に達し、ツィーアフェルトは、娘の両親を前に苦しい言い訳をする。賢明なヴィリバルトは、フィリピーネをあきらめて、求婚相手をアマーリアへと変えてみるが、思わせぶりていた彼女も、貴族の身分は捨てられないと断る。アーネンシュトルツ夫人と異父姉妹である彼女の存在は、一家から距離を持って、身分違いの結婚の背後にある欺瞞と野

心を暴露している。

劇の特徴として、人物の動きを示すト書きがレッシング、クヴィストルプ、ヴァイセらに比べて非常に少ない点あげられる。ウィットを交えて辛辣な調子で相手に迫る場面も多く、女性の側からのわざとらしい挑発、底意地の悪さも感じられる。説明調、市民階級をこきおろす台詞が続き、劇に教訓性を持たせる傾向が顕著である。ヒポコンドリーを治療する場面もなく、これは女性達を都合の悪い場面から逃れさすカムフラージュ手段である。

1744年の『フランス人女家庭教師もしくは令嬢』においても、ヒポコンドリーあるいはふさぎの病が雲隠れの手法として使われている。富裕商人ゲルマン一家にフランス人家庭教師が住み込み、子ども達に躰を教えているのだが、風変わりな作法を仕込んだ上に、すっかりフランスかぶれにってしまった。家計の方も危機に陥れて、家庭教師は得体の知れぬ元将校と家僕を連れ込み、具合が悪いことを理由に、二階の自分の部屋に引き籠もる。ゲルマンの友人で訪問者のヴァールムントは、家のフランスかぶれに皮肉を言う。

ヴァールムント フランス風の流行のせいで胆汁熱になりそうだよ。フランス人はドイツ人の脳みそを狂わせてしまっただけじゃない。連中は今度は遅い時間の食事で俺達の胃をおかしくさせたいんだ。¹³ (IV/1)

ストーリーは第Ⅳ幕9場から急展開し、誘拐調になり、家庭教師は一方的な悪玉になる。最後に幼女も無事戻り、パリ行きもフランス流躰もご破算となる。

本喜劇は人物の交替が少なく、前半は動きが極めて遅い。フランス文化批判のはずが、ドイツ人に対する悪口も数多くちりばめてあり、作者はドイツ人自身を卑しめている。ヒポコンドリーは不在の理由となる策略手段と化している。レッシングがハンプルク演劇論で劇評に書いたように、ここにあるのは意地悪な嘲りの笑いだけである。

ルイーゼ・ゴットシェートの喜劇において、ヒポコンドリーが明白に演技としての手段となっているのが、1745年に書かれた『遺言状』である。ザクセン喜劇派の作家達の間で時代病とも言われたヒポコンドリーやメランコリーが描写された喜劇が相次いだ。

フォン・ティーフェンボルン陸軍大佐の未亡人は侍従と再婚しようと願う。そのために、ティーフェンボルン未亡人は侍医ヒッポクラースと図って、自分は重症のヒポコンドリーにかかっているかのように装い、奥の部屋へ引きこもるように見せかけて、姪甥達の本音を見極めてから、遺産分与の遺言状を書こうというのである。カロリーネはあくまでも未亡人の症状を案じ、長女アマリーエは侍医ヒッポクラースを丸めこみ、おぼができるだけ重症であると見せかける診断をく

だすように働きかける。ヒポクラースとは、古代ギリシャの医学者ヒポクラテスのパロディーである。長女の元には財産をかぎつけた二人の求婚者が近づき、甥フォン・カルテンブルンはすでに浪費を始めている。ヒポクラースの他に未亡人は侍従も医者に変装させてシュラークバルザム（＝卒中鎮痛剤）医師と名乗らせて、姪、甥、求婚者らの様子を探らせる。彼女は医者や侍従の前ではひどい病気のふりはしなくなり、探りの指示を与える策略の場となる。ヒポコンドリーはまさしく演技としての仮病であり、病人を装うことで、身内から距離を置いて真意を確かめるのである。

ザクセン類型喜劇において典型的であるように、ここでも良徳と悪徳人物の対照的図式が見られ、カロリーネとは対照的にアマリーエに女のずるさの描写や型にはまった悪役の台詞があてられている。

未亡人の症状をめぐって二人の医者が偽診断を繰り返すIV幕が喜劇最大の山場である。ティーフェンボルンをヒポコンドリー患者に仕立て上げ、次々に捏造した病名をつけ足し、出まかせの医学知識をひけらかす。¹⁴ ヨーロッパ伝統喜劇のコメディア・デラルテ的手法である。ヒポクラースによれば、夫人の病は不眠症から始まり、脈拍が乱れ、強いリュウマチがあり、胸膜炎、肺結核、咯血を憂慮しなければならなかった。夫人の咳はリュウマチがもとにあるという。侍医はラテン語で病名をあげることで、ますます自分の知識を権威づけようとする。彼女は坐骨神経症の上、角膜に病変があり、眼部にガンがあるという。ありもしない病名を語る侍医シュラークバルザムもいかさま医師を演じている。ヒポクラースは、藪医者是人々から血液や命、そしてお金も一緒に吸い取ってしまう吸血鬼のようなものと揶揄する。侍医と偽医者との問答は、侍医が藪医者呼ばわりされて、不機嫌になって終りとなる。

公証人を前にした遺言状作成場面は、モリエールの『病は気から』のクライマックスを想起させる。演技としてのヒポコンドリーのヴェールがはずされ、変装の真意が明かされて、財産相続騒動の劇中劇にも幕が下りる。女性が病む演技をする一方で、男性は女性の指示を受けて、変装の手法を使って、庭師、退役将校や医者になりすまし、屋敷へ出入りする自由を与えられる。ルイーゼ・ゴットシェートの喜劇においては女性達の演技として、ヒポコンドリーや病が使われている点が他のザクセン類型喜劇と大きく違っている。

5 ゲラートとメランコリー

クリスチャン・フルヒテゴット・ゲラートは敬虔なキリスト教徒であり、ライプツィヒ大学の教授でもあったが、私生活ではメランコリーをわずらっていた。この作家は度々、生死の境をさまよう程の病におかされ、メランコリーの治療を繰り返し受けていた。その伝記をひもとけば、教授資格論文を執筆した29歳頃、1744年最初の重い病に罹り、1752年初め頃にも再び重い病に罹

り、9月初めから4週間の温泉療法を受けていた。その翌年1753年5月4日から6月20日には、主治医同伴でチェコのカールスバートに赴き、再び温泉療法を受けていた。¹⁵ 病が回復すると彼は執筆に向かった。ゲラートの場合、よく受けたのが3～4週間の温泉療法である。1760年にはシュテルムタール等ザクセンの静かな山間に過ごすこともあり、医師のすすめで鉱泉を飲むようになった。¹⁶ 翌年1761年6月から7月にかけて4週間の鉱泉療法を受けた時期もあった。クヴィストルプの『心気症の男』においてクレプスシュタイン医師がすすめる鉱泉療法さながらである。ゲラートこそメランコリーとともに生きた作家である。

ゲラートは類型喜劇ではないが、短い喜劇『病妻』（1745）の中でヒポコンドリーにかかった市民階級の女性が身内の献身的介抱により、手相見の迷信から離れて快癒する様をコミカルに描いた。重い病気を得たと思ひ込んだシュテファン夫人は、悲観的な思いにとらわれ、夫は病を治すためにはお金にいとめをつけずに、医者と手相見を家において治療にあたらせている。夫人の訴えは吐き気、心悸亢進、息苦しさ、不安、脇腹の痛みと多岐にわたる。甥の妹の新調ドレスに嫉妬心を抱いたのをきっかけに発作が起り、彼女は立ちあがることすらできなくなる。こうした症状は現代ではヒステリーの範疇に入るといえる。夫人には強壮剤が処方され、精神を強くする手立てがとられたのである。病む女の姿は、作者自身の苦しみが投影されたようなものである。ブッセは心理学の立場から、この『病妻』はヒポコンドリーの女性版であり、「夫人は、ため息やうめき、嘆き、小理屈によって、介抱を受けたり、気遣ってもらう目的を達しようとしている」と興味深い指摘をしている。¹⁷

夫人の病を気遣う夫や姪、科学的診断により薬を処方する義弟の医者といった介抱する側の人の輪がゲラートにおいては細やかに描かれている。絶えず気を病む夫人の姿は、『心気症の男』におけるクロイツ夫人と重なるところがある。後日、この喜劇がライプツィヒのコッホ座で上演された時、演じたコッホ夫人の真に迫った演技に感動して、ゲラートは自分の薬を差し出そうと申し出た程であった。¹⁸ ゲラートにおいては気を病む人間や医学が諷刺されているのではなく、病む人をめぐる騒動のほほえまさが、調和した世界において表現されているのが特徴である。

6 レッシングの『若い学者』と『自由思想家』におけるヒポコンドリー

若きレッシングはカーメンツの町を後にしてライプツィヒ大学に進学した。この都会は当時はドイツの小バリとも称される程、活気に満ちた先進文化の地でもあった。そこで彼はカロリーネ・ノイバーが率いる一座と出会い、演劇の魅力にとりつかれた。レッシングはその頃の母親宛ての手紙の中で、「喜劇が自分のものになりました」¹⁹ と述べている。レッシングは自身とほぼ等身大の、だが自信過剰で精神が不安定で、被害妄想にもとりつかれた主人公ダミスをコミカルに描いた。この『若い学者』（1747）という喜劇によって、ノイバーは彼の才能を見出し、初演もし

ている。レッシングの初期喜劇には、ザクセン喜劇の影響を受けたものがあり、類型化した偏った性格の人物が登場し、諷刺的傾向を示すものがある。

ダミスは学問の話をするとうれしく高揚して、周囲の人々に不遜な態度もとる。だが、気分が沈むと今度は不安定な精神状態にも陥る。彼は恋敵ファーラーと対峙すると、ユリアーネをめぐる嫉妬心が起こり、自分はたぶらかされていたとして、根拠のない被害妄想を抱くほどである。待っていた論文の結果に落胆した彼は、本を書斎の壁に投げつけて憤懣の感情を爆発させる。

このようにダミスには落ち着きのなさや感情の激しい起伏が見られる。ブッセは青二才ダミスのむら気は、暗い書斎に引き籠ることからくるヒポコンドリーだととらえ、このむら気は学者特有の気質だと述べている。²⁰ 一人きりの思索から一転して、家族やライバルには攻撃的になる。

レッシングの『自由思想家』では、フリーメーソンかぶれの自由奔放な若者アドラストが、神学上の論争で友人の牧師テオフィンと対立する。さらに彼はテオフィンの許嫁の娘に憧れ、次第に被害妄想もふくらませる。恋の悩みも加わって、アドラストは若い牧師を一方向的に批判するようになる。その一方、彼はユリアーネの前では自分に好意を持ってもらえるのか不安になり、しだいに不安定な精神状態を示す。ダミスと同様、アドラストは時に不遜な態度をとるが、本来陽気な性格である。テオフィンとの友情の中で、自由思想家アドラストは偏見と憎しみの感情を持った愚かさや気づき、改悔することができる。この人物においては、陽気な顔と、恋敵には陰湿な顔という二つが交替し、病的ではないが、時代の気分がここにも反映している。

結 語

1740年代のライプツィヒにおいて、ゴットシェート派を中心に書かれたザクセン喜劇では、あえて類型化した偏った性格の人間が設定されて諷刺性が強調された。ヒポコンドリーは時代の流行病ともされ、これら類型喜劇の作者の一人ゴットシェート夫人も一時罹っており、ゲラートは生涯メランコリーの治療を続けていた。クヴィストルプの『心気症』は、時代の転換期で心身が不安定になったインテリ青年の内面の不安をつぶさに伝えており、現代人にも共鳴するところがある。

ヒポコンドリーはドイツ啓蒙主義の時代、合理主義と感傷主義との間で揺らいだ時代の気分を反映した精神状態とも言える。ザクセン喜劇の作家達は、時代の流行病を喜劇の中にとりこむことで、人間の弱点を容易にさらけ出すことを可能にし、教訓を引き出し、それによって喜劇も人間臭く面白くなると考えていたのではないだろうか。

註

- 1 本研究は、平成23年度日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究（C））による助成金交付を受けて行なっている課題番号 23520386 研究課題名「18世紀中葉におけるライプツィヒ派の演劇改革とザクセン喜劇の生成および受容」の研究成果の一部である。
- 2 Busse, Walter: *Die Hypochondrie in der deutschen Literatur der Aufklärung*. Mainz (Diss.) 1952, S. 6.
- 3 Quistorp, Theodor Johann: *Der Hypochondrist*. Ein deutsches Lustspiel. In fünf Aufzügen. In: Johann Christoph Gottsched (Hg.): *Die deutsche Schaubühne*. Sechster Teil. Stuttgart: Metzler 1972, S. 280.
- 4 Quistorp: *Der Hypochondrist*. (I/1) Ebenda. S. 280.
- 5 ゲオルク・エルンスト・シュタール（1659-1734）。ドイツのワイマール宮廷の侍医として評判が高く、後にハレ大学教授、プロイセン王の侍医となり、ベルリン医学アカデミーの会長を務めた。医学理論や解剖よりも経験を重視した。フロギストン説を立てて、18世紀初頭の医化学界で一世を風靡した。
- 6 ムスカートは、ライデン派の医学者ヘルマン・ブールハーフェ（Herman Boerhaave, 1668-1738）の支持者であることを暗に示している。
- 7 Quistorp: *Der Hypochondrist*. (I/1) Ebenda. S. 287.
- 8 Quistorp: *Der Hypochondrist*. (III/3) Ebenda. S. 332.
- 9 アッカークネヒト、エルウィン・H.: 『世界医療史—魔法医学から科学的医学へ—』井上清恒、田中満智子（共訳）（内田老鶴圃）1983, S. 112.
- 10 アッカークネヒト：Ebenda. S. 112.
- 11 アッカークネヒト：Ebenda. S. 112.
- 12 Gottsched, Luise: Brief Adressat unbekannt. Leipzig den 27. April 1744. In: Louise Gottsched — „mit der Feder in der Hand“ Briefe aus den Jahren 1730-1762. Hrsg. v. Inka Kording. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1999, S. 113.
- 13 Gottsched, Luise: *Die Hausfranzösin, oder die Mammsell, ein deutsches Lustspiel in fünf Aufzügen*. Ebenda. Sechster Teil, S. 141-142.
- 14 Gottsched, Luise: *Das Testament*. (IV/1) Ebenda. S. 154.
- 15 Bernd Witte (Hg.): „Ein Lehrer der ganzen Nation“ Leben und Werk Christian Fürchtegott Gellerts. München: Wilhelm Fink Verlag 1990, S. 18.
- 16 Ebenda. S. 20.
- 17 Busse: Ebenda. S. 160.

- 18 Brief von Gellert an Johann Heinrich Gottfried Koch. Leipzig 1752.
 19 Brief von Gotthold Ephraim Lessing an Justina Salome Lessing. Berlin den 20 Jenner 1749.
 20 Busse: Ebenda. S. 161.

参考文献

一次文献

- Gellert, Christian Füchtegott: *Die kranke Frau*. In: Gesammelte Schriften. Kritische, kommentierte Ausgabe. Hrsg. v. Bernd Witte. Bd. 1-6. Berlin u. New York: Walter de Gruyter 1987-2000.
- Gottsched, Luise Adelgunde Victorie: *Der ungleiche Heirath. Die Hausfranzösin. Das Testament*. In: Deutsche Schaubühne. Hrsg. v. Johann Christoph Gottsched. Faksimiledruck. Nach der Ausgabe von 1741-1745. Vierter, Fünfter u. Sechster Teil. Stuttgart: Metzler 1972.
- _____, Louise Gottsched - mit der Feder in der Hand. Briefe aus den Jahren 1730-1762. Hrsg. v. Inka Kording. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1999.
- Lessing, Gotthold Ephraim: *Der junge Gelehrte. Der Freigeist*. In: Werke und Briefe in zwölf Bänden. Hrsg. v. Wilfried Barner u.a. Bd.1. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1989.
- Mylius, Christlob: *Die Ärzte*. In: Das deutsche Drama des 18. Jahrhunderts in Einzeldrucken. Hrsg. v. Reinhart Meyer. Das Repertoire bis 1755. Bd. 5. Das Lustspiel 2. München: Kraus Reprint 1981.
- Quistorp, Theodor Johann: *Der Hypochondrist*. In: Die Deutsche Schaubühne. Hrsg. v. Johann Christoph Gottsched. Faksimiledruck. Nach der Ausgabe von 1741-1745. Sechster Teil. Stuttgart: Metzler 1972.

二次文献

- Bernd Witte (Hg.): „Ein Lehrer der ganzen Nation“ Leben und Werk Christian Fürchtegott Gellerts. München: Wilhelm Fink Verlag 1990.
- Brüggemann, Diethelm: Die sächsische Komödie. Studien zum Sprachspiel. Köln u. Wien: Böhlau 1970.
- Busse, Walter: Die Hypochondrie in der deutschen Literatur der Aufklärung. Mainz (Diss) 1952.
- Duden, Barbara: Geschichte unter der Haut. Ein Eisenacher Arzt und seine Patientinnen um 1730. Stuttgart: Klett-Cotta 1987.
- Hildebrandt, Dieter: Christlob Mylius. Ein Genie des Ärgernisses. Preußische Köpfe. Berlin:

- Stapp 1981.
- Hinck, Walter: Das deutsche Lustspiel des 17. und 18. Jahrhunderts und italienische Komödie. Stuttgart: Metzler 1965.
- Kobayashi, Ekiko: Hypochondrie im Konflikt der Kulturen. Satire und Wissenschaft in C. Mylius' *Die Ärzte* und Th. J. Quistorps *Der Hypochondrist*. In: Akten des XI. Internationalen Germanistenkongresses Paris 2005. Bern: Peter Lang 2008. Bd. 7, S. 237-244.
- _____, Heilkunde der „Hypochondrie“ in der sächsischen Komödie. In: *TRANS Internet-Zeitschrift für Kulturwissenschaften*. 17. Nr. Januar 2010.
http://www.inst.at/trans/17Nr/1-9/1-9/_kobayashi 17.htm
- Lukas, Wolfgang: Anthropologie und Theodizee. Studien zum Moraldiskurs im deutschsprachigen Drama der Aufklärung (ca. 1730 bis 1770). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 2005.
- Steinmetz, Horst: Die Komödie der Aufklärung. 3. Auflage. Stuttgart: Metzler 1978.
- アッカークネヒト、エルウィン. H.: 『世界医療史—魔法医学から科学的医学へ—』 井上、田中 (共訳) (内田老鶴圃) 1983.
- ガミー、ナシア: 『現代精神医学原論』 村井俊哉 (訳) (みすず書房) 2009.
- 酒井明夫 (編): 『こころの科学の誕生』 (日本評論社) 2003.
- 松下正明 (編): 『精神医学の歴史 (臨床精神医学講座 S1)』 S1巻 (中山書店) 1999.
- テレンバッハ、フベルトゥス: 『メランコリー 改訂増補版』 木村敏 (訳) (みすず書房) 1985.
- 小林英起子: 「ザクセン喜劇に照らしてみたクリストロープ・ミュリウスの喜劇『医者』における諷刺と医学」 日本独文学会北陸支部 『ドイツ語文化圏研究』 第1号、2003, S. 18-28.
- _____, 「ゴットシェート夫人の喜劇における病と劇作術 —演技としてのヒポコンドリー—」 日本独文学会北陸支部 『ドイツ語文化圏研究』 第7号、2009, S. 14-33.

Hypochondrie und Medizin in der sächsischen Komödie

Ekiko KOBAYASHI

In den frühen Komödien der Aufklärung wird die „Hypochondrie“ als eine häufige Krankheit dargestellt. In *Der Hypochondrist* (1745) von Theodor Quistorp zeigt die Hauptperson Ernst unterschiedliche Symptome der Hypochondrie, die sich in der heutigen Medizin verschiedenen seelischen Krankheiten zuordnen lassen. In seinem ernsthaften Benehmen und seiner außergewöhnlichen Angst vor Krankheiten liegt die größte Komik. Es gab noch im 18. Jahrhundert keine klare Unterscheidung zwischen Melancholie und Hypochondrie. In der Diskussion über ihre Diagnose zwischen den beiden Leibärzten lassen sich zwei Richtungen der Mediziner in Europa widerspiegeln: die von Ernst Georg Stahl (1659-1734) und die von Herman Boerhaave (1668-1738). In den gegensätzlichen Diagnosen zwischen Quellenwasser und Medikamenten liegt auch eine Komik. Es gelang Quistorp in Fröhlichinn, den Hypochondristen lachend im Ernst aufzuklären.

In Christlob Mylius' *Die Ärzte* (1745) leidet die Mutter an Melancholie. Bei Mylius liegt die Komik darin, die Lasterhaftigkeit der zwei Leibärzte, ihre falschen Diagnosen und die Leichtgläubigkeit der Kranken zu entlarven. Die Mutter in Frau Gottscheds *Die ungleiche Heirath* (1743) leidet ebenfalls an Hypochondrie. Gottschedin verwendet diese Krankheit eher als eine Art Listigkeit im Drama. In einem Brief offenbart die Autorin selbst ihre Hypochondrie. In *Die Hausfranzösin* (1744) wird es über Gallenfieber und Hypochondrie erwähnt. In *Das Testament* (1745) erdichten zwei parodierte Ärzte mehrere Krankheiten. Die Witwe verhält sich hier ebenfalls als „Hypochonder“, um die verborgenen Gedanken ihrer Familie auszuhorchen. Die Komik und die Satire mit Medizin ist eine Anspielung auf Molière und das Stück zeigt Einflüsse der Commedia dell'Arte.

Christian Fürchtegott Gellert litt an Melancholie und äußerte sich darüber im Brief an Johann H. G. Koch vom 1752. Seine Kenntnisse über Melancholie und Heilmittel spiegeln sich im kleinen Nachspiel *Die kranke Frau* (1745) wider. Lessings frühen Komödien zeigen noch die Satire und die Spuren der Zeitkrankheit. Er schilderte einen grillenhaften Studenten in *Der junge Gelehrte* (1747), der aus Jähzorn Bücher an die Wand hinwirft. Adrast in *Der Freygeist* (1749) zeigt Wut vor seinem Nebenbuhler, dagegen geriet er in Melancholie wegen der Liebe. Er zeigt seelisches Schwanken.

Hypochondrie symbolisiert eine typische Krankheit im aufklärerischen Zeitalter zwischen Rationalismus und Empfindsamkeit. Ich bin der Ansicht, dass die Autoren der sächsischen Komödien diese Krankheit verwendeten, damit sie wohl die schwache Seite der Menschen im Theater aktueller und reizvoller zeigen konnten.